世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座

第９回　「宗像の信仰と人々の関わり」

本講座は「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界的な価値を明らかにするために行われた調査研究成果を、最新の知見と合わせて広くお伝えすることを目指しています。
今回は宗像の歴史、地誌や、宗像大社にまつわる祭礼を通して、宗像の信仰と人々の関わりを考えます。

日　時：令和２年２月 15 日（土）13:30-16:30

場　所：海の道むなかた館　講義室

スケジュール：

13:30 開会あいさつ

13:40 講演１「宗像の島々：小呂島、沖ノ島、大島の歴史と地誌」

服部 英雄（はっとり　ひでお）先生

15:00 休憩(15 分)

15:15 講演2「宗像大社の無形民俗文化財」

森 弘子（もり　ひろこ）先生

16:30 閉会

宗像大社の無形民俗文化財

世界遺産公開講座
2020／2／15　森　弘子

Ⅰ宗像大社

式内社（宗像神社三座、織幡神社一座）
旧官幣大社（福岡県下－香椎宮・宗像大社・筥崎宮）
三座の神
沖津宮（田心姫命）・中津宮（湍津姫命）・辺津宮（市杵島姫命）
天照大神と素戔嗚尊の天安河原における誓約によって生まれた三女神

汝三神　宜しく 道中に　降居して 天孫を助け奉り 天孫に祭かれよ

『日本書紀』第一の一書

＊勅祭社としての復興を目指す
昭和 17（1942）年　宗像神社復興期成会結成
・宗像神社史の編纂
・沖ノ島の発掘調査
・歴史的祭事の復興
＊宗像神社は昭和 30 年代半ばより「宗像大社」と称し（通称）、昭和 52 年正式に法人名登記を行った
＊平成 29（2017）年 7 月　「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界遺産となる

Ⅱ宗像神社の祭事

①　中世
年中 5921 度・閏年には 9468 度
＊祭事関係史料
宗像宮年中諸神事御供下行事（鎌倉期）
正平二十三年宗像宮年中行事（1368 年）
応安神事次第－応安８年（1375 年）
祝詞禰宜致広の注進した宗像宮年中行事を根幹、六種類の写本がある
＊天正１４年（1568）宗像大宮司の宗家が滅び、加えて神領の喪失、神職・社僧の離散、社殿・寺堂の退転などによって、宗像宮は著しく衰微。

②近世
・今は其礼絶えて、古の百分の一も行われず　　貝原益軒『宗像神社縁起附録』
・凡年中三十六度、かたばかりの祭礼を行ふ　　青柳種信『筑前国続風土記拾遺』
＊まとまって年中行事を記したものはない。『宗像事蹟考』『宗像宮年中諸祭礼御供米定目録』などによって復元すればおおよそこの数

③明治
・明治 4 年 5 月 14 日　　国幣中社
・国家の定めた祭事中心、古来のまつりは、私祭・民例祭と位置づけられる

④戦後
・神社本庁の指示する大綱による

・国家的祭祀→氏子・崇敬者に由縁の深い行事に重点。
・歴史を遡って復元の努力。
⑤現在
・現在年間４０余度の祭事
春の祭
春季大祭（4 月 1～2 日）、五月祭・浜宮祭（5 月 5 日）、沖津宮現地大祭（5 月 27 日）
夏の祭
大祓式（6 月 30 日）、　夏越祭・茅の輪（7 月 31 日）、　大島七夕祭（8 月 7 日）
秋の祭
秋季大祭（10 月 1～3 日）・みあれ祭（10 月 1 日）
冬の祭
古式祭（御座）・鎮火祭（12 月 15 日に近い日曜日）、大祓式・除夜祭（12 月 31 日）、
祈年祭（1 月 1～3 日）、節分祭（2 月 3 日）

Ⅲ春・夏のまつり
① 春季大祭
４月１日・２日に、本殿を中心に斎行される。古くは保存会といわれ、社宝類の虫干しをかね、祭を行った後に参拝者に社宝を公開したという。
種まき時期に当たり、一年の五穀豊穣を祈る。
停止された終戦前の「祈年祭」に代わったともされる。
＊宗像神社の祈年祭はすでに『延喜式』に見え、毎年 2 月、恒例の官祭として三座分の国幣をうけ祭典を行っていた。
【主基地方風俗舞】4 月 1 日
昭和天皇即位に際して、福岡県早良郡脇山村の田が主基斎田に撰ばれた。
その大嘗祭に主基地方の風俗舞として多忠朝が新作した舞曲で、福岡県下で保存伝承する趣旨から宗像大社に下賜され、春秋の大祭で奉納されている。

小忌衣（おみごろも）を着けた男性 4 人の舞で、笛・拍子木による奏楽は越天楽に似ている。

当初は田島地区の青年団で継承したが現在は主基地方風俗舞保存会が伝える。
昭和 53 年 7 月 12 日　宗像市無形民俗文化財に指定。
歌詞
参音聲　　高良山
千早振る高良の山の神籠石かけじ崩れじ御代にならひて
（八女郡星野村の『ハンヤ舞』の旋律を採って、多少変更が加えられている）
破　　伊岐松原
うち渡す生の松原いきいきと栄えむ御代のいろぞ見えたる色ぞみえたる
（黒田節を骨子として全体的に雅楽越天楽のメロディーを感じさせる。舞いは築上郡宇島の『雨乞舞』の手振り、足ぶりが取り入れられている）
急　　企救濵
君が代は良きことのみをきくの浜命ながきが嬉しかりけり
（八女郡矢部村の『茶山唄』の旋律が一部取り入れられる。舞いは一般盆踊りの形式および北九州市門司区大里の盆踊りの手振り・足ぶりが模倣されている。
退出音聲　　和布刈神社

早鞆の宮の祝が刈るといふめでたき御代にあへる我かな
（八女郡星野村上郷の俚謡『ハンヤ舞』の旋律が主体となっている）

【浦安舞】

天地の神にぞ祈る朝凪の海の如くに波たたぬ世を　　昭和天皇御製
紀元 2600 年記念に作られる

② 五月祭

5 月 5 日　中世の「五月会」の復興

放生会とともに中世、辺津宮の年中最大の祭儀。

許斐社の神輿と黒尾社の神が田島宮（辺津宮）着御
中殿御廟院で御供の神事
五社神輿（沖津宮・中津宮・辺津宮・鐘崎織幡宮・許斐社）と伊摩・浪折・黒尾三社の神馬が行列して五月浜の浜殿に神幸
浜殿にて御供大神事　　浜殿にて饗膳
それぞれの宮に還御
この間に端午の節供の御供献進の儀と政所社では田植神事・田楽も行われた。

近世―5 月 5 日「総社祭」として、辺津宮で供膳の儀が行われるにすぎなくなった＊宗像市皐月では戦後までも村の 11 歳になった男子は江口の皐月神社の宮座に入り、5 月 5 日の大祭には、村中の男性が座について酒 2 合・鯛・餅などの饗に預かったという。座の始まるのは正午満潮時。「五月さまのお座」と称し一日酒興を尽くしたといい、これがすむまで、江口分の秣場の馬草は刈ってはならない掟になっていた。五月会浜殿神幸祭の名残を伝えたものである。

＊みあれ祭の再興に続いて皐月祭・浜宮祭が郡内神社多数の参加を得て再興されたが、現在は五月祭・浜宮祭として 5 月 5 日にショウブ・チマキをお供え祭典を行い、終わって現地でチマキを頂く直会があるにとどまる。

③七夕祭

8 月 7 日　大島中津宮

『正平二十三年宗像宮年中行事』（1368 年）に「七月七日　七夕虫振神事」
『大島御神事』に「七月七夕」
『大島第二宮年中御供米之事』（天文 22 年（1553））に「七月棚機」
『第二宮御神事次第』（元禄 5 年（1692））に「七夕棚機御神事」

「社前に天の川流る。この川御嶽の下よりいつ。其川のはた左右にわかれて、牽牛織女二星の小社あり。川をへたてたり」（『筑前国続風土記』巻 16 宗像郡上大島）

「7 月 1 日から 7 日まで、牽牛社・七夕宮（織女社）にお籠もりし、河中に棚を結い、タライに水を張って男女の仲を占う」（『石見女式髄脳』）

牽牛社―中津宮の向かって右小高い所
織女社―左手の天の川の畔小高い所

真ん中を御嶽山を水源とする天の川が流れる。水神の到来を待つにふさわしい。

＊杉田久女句碑（昭和 7 年吟行）

星の衣つるすもあはれ島の子ら
おりたちて天の川原にくしけずる

＊現在は「元気な島づくり事業推進協議会」とタイアップ

＊志賀島の七夕祭―４８月 7 日、各地の漁船が大漁旗をなびかせて志賀海神社に参り、事無き柴を受けて帰る。宗像の津屋崎からも出向いている。

Ⅳ秋期大祭

9 月 30 日　総社地主祭、宵宮祭

10 月 1 日　みあれ祭、主基地方風俗舞（宗像市指定無形民俗文化財）

10 月 2 日　流鏑馬神事、秋季大祭二日祭（翁舞）、末社祭（七五末社百八神）

10 月 3 日　秋季大祭三日祭（浦安舞）、高宮神奈備祭

地元では田島放生会とも言う

秋季大祭の原型＝放生会

第４３代大宮司宗像氏経　　貞永元年（1234）10 月 9 日入社まず放生会を執行。

中世は 8 月 13 日～15 日

元禄 8 年（1695）以来 9 月 1 日

弘治 3 年（1557）神仏混合の祭舎が焼亡、大規模な祭典を行うだけの経済力がなくなったこと、さらに江戸期、寛文 5 年（1665）宗像神社が唯一神道に帰したなどのことから、仏教に起源をもつ放生会は表向きにはその名称を失うに至り、祭の規模も大幅に縮小。

明治の新暦採用により 10 月 1 日～3 日→秋季大祭

戦前の例祭―11 月 15 日（辺津宮・中津宮）、16 日（沖津宮）

一条兼良『公事根源』に 11 月上卯日を「宗像祭」としていたものを採用

戦後の例祭―10 月 2 日に変更

延宝３年（1675）黒田光之が猿楽の舞台建立

内浦村（岡垣町）の亀大夫、猿楽を奉納→ 翁舞（２日）

翁面－宗像興氏の時、鐘岬の海面に現れた面

【放生会】―宗像神社最大のまつり

起源―「当宮の御託宣に云う」「吾、昔五千九百余の従神を率いて、二千余万里の風波を凌ぎ、御手長を振り、異国凶賊を害した。是則ち国の為、民の為であったが、若干の殺罪を犯したことは否めない。早く般若経を書写し、放生供養をすべきである」

（『宗像大菩薩御縁起』）

中世の放生会

13 日―摂社許斐社（熊野権現）の神輿が許斐山から辺津宮の社務館の浮殿に神幸（市渡という）。神幸した許斐社の神輿の前で、大宮司によって御供が進められ、般若心経の読誦が行われ、ついで終日終夜、放生会の試楽（舞楽・一物・相撲・風流・田楽・延年・猿楽）が行われる。

14 日―辺津宮三所宮と許斐社・織幡社の五社の神輿が浜殿に神幸

① 政所社榊神事　②社務館浮殿大御供　③中殿（第二宮）御廟院の大御供

④ 五社神輿浜殿御幸　⑤惣社（第一宮）大御供

浜殿神事（釣川畔）―棚守によって、五社の神霊が神輿から浜殿の御棚の上に据えられ、次ぎに用意の酒肴が供えられる。この酒肴は櫑子（ライシ・高坏様の物）に畳餅（タタミモチイ）を載せたものを二前、御肴五前、御酒二瓶子であった。この神供は、惣社楼門前の池の中島から伝供によって進供された。進供の後に祝詞を奏し、夜に入り、風流・田楽・延年舞・猿楽などの芸能が行われた。

15 日―浜殿で放生会の大神事があり、終わって 16 日の曉にそれぞれの社に還御

辰の時（午前 8 時頃）、舞楽「胡蝶」と「迦陵頻伽」が舞われる

巳時（午前 10 時頃）、五社の神輿を船に乗せそれぞれに御供を進め、御　　前の浜である釣川で船闘（フナクラベ＝競漕）。5 艘の神船は、鐘崎、神湊、今空閑

勝浦浜から各 1 艘、津屋崎から 2 艘出した。常に許斐社の神船が勝利を収めることになっていた。

王之舞が釣川の畔の広庭で舞われる。

＊『宗像記五』田島宮之事には「今の御祭礼の儀式は、社壇の左右、築地の内外、馬場の前後の御仮屋の道筋に、武士充満て、非常を警固す。其儀尤も厳重なり。江口の浜より十二艘の船を飾りて、乙女子・神楽男・各威儀をとゝのへて、此船に乗り、楽人音楽を奏し、乙女色々の作物を捧げて、舞の袖を翻す。誠に神の御心を和ぎ給ふべき粧いなり」

【七十五末社百八神】

神郡宗像―古代、宗像一郡はすべて宗像神社の神封

神郡のあった社―伊勢大神宮、常陸の鹿島神宮、下総の香取神宮、安房の安房神社、紀伊の日前国懸神宮、出雲の熊野神宮、筑前の宗像神社

こうした意識は時代が下っても人々の間に浸透し続け、鎌倉時代までには所謂「七十五末社（百八社）」が成立した。

宗像大社境内、23 の末社に祀る―黒田光之、延宝 3 年（1675）

【高宮】

上高宮のある宗像山頂には古墳がある―宗像族の祖神墳墓の地

下高宮は宗像山の中腹にあり、祭祀の上では第一宮とより密接な関係にあった。

ここからは大島・沖ノ島が一直線上に見渡すことができる―現在の高宮祭場

高宮の地は、神社の疲弊期に人手に渡る所であったが、昭和 18 年に土地を買収、同 27 年に整備開始し 30 年に古神道のあり方を踏まえた社地として古代祭場さながらに復元した。広庭に玉砂利を敷き詰め、真ん中に高宮の地に自生している常緑広葉樹を集め植え神籬とし、その前に石で囲った祭祀の壇、黒木の供物棚を設えている。

＊高宮神奈備祭―平成 17 年から

神楽「悠久の舞」、八女神事古歌の奉唱

八女神事は中世 12 月 25 日に行われた。

『神事次第』によると上高宮で酉時（午後 6 時頃）に始まる。

御供―あをつみの餅（小判形のよもぎ餅）に大島に生息する「事無柴」を添える

八女―8 人の乙女による神楽舞の神事であった。キネノヲサに続いて八女が行列をつくり、神前を三返、袖を翻しつつ笛の音に合わせて歩行するというものであった。その際、キネノヲサが「八女は　誰か八女そ　天に坐す　天若御子の　神の八女」という神功皇后が筑紫行啓の折に詠んだと伝えられる神歌を歌った。

Ⅴ古式祭

・辺津宮は田島宮ともいわれ、江戸期以来、田島村の村氏神的性格も帯びる。

・「古式祭」は旧田島村の宮座という意味もある。

《古式祭の歴史》

・江戸時代には「総社祭」といわれ、11 月 15 日に行われた。

・『筑前国続風土記附録』宗像郡上田嶋神社の条に「年毎の十一月十五日祭あり。宗像祭という。近村あまた所より詣で来り、まつ十四日夜海辺宮（神湊なり）の辺の塩井をとり、曉に至りて、神前にささげ、拝し畢て、神司深田兵部・日並少納言・安部掃部・力丸蔵主、四家饗膳をなす。其余の神官は祭にあづからす。此事いつの比よりかありけん。詳ならず」とある。

・宝暦 8 年（1758）の『御宮霜月祭帳』によると、田島村は一番山下、二番土橋、三番上殿、四番片脇の四組に分かれ、この祭に奉祀している。
・一条兼良の『公事根源』に十一月上卯日を宗像祭としており、もとは 11 月中の卯の日に五月浜で祭礼を営んでいたのを、大宮司氏貞以降 11 月 15 日にしたという。「霜月祭」ともいわれ、村中から御供米があげられ、年越しの鏡餅をつくった。新穀感謝の祭である。
・明治維新後は「民例祭」とされ、さらに明治 43 年高向秀實宮司から内務大臣に祭日と名称の変更願を出し、翌 44 年からは新暦にあわせて一月遅れの 12 月 15 日に改められ「古式祭」と称するようになった。この際、新暦の 11 月 15 日を例祭日とし、4 月 11 日～13 日を春季祭、9 月 30 日～10 月 2 日を秋季祭とすることも定められている。

《現在の古式祭》

・旧田島村の四組を分けて、上殿（うえどん）・福田・吹浦・片脇・本村（ほんむら）・宿谷（しゅくのたに）・山下・飛松（とんまつ）の 8 組とし、毎年交替で当番を務めている。

・元々は田島地区の行事であったが、現在は「古式祭御座保存会」が結成され、田島地区の人が供物や料理の準備をし、お座には一般の人も加わることができる。

① 特殊神饌　「御菓子」　三台（三座分）現在は神職が作る
・台盤の中央に江口の浜で採れたゲバサモ（ホンダワラに似た海藻アカモク）
・台の四角には、コップ状の竹籠。中に新藁を半紙で包んで差し込む。
・これに 26cm 長さの竹串に扇形に切った九年母と菱形に切った餅を挿す。
・一籠に 15（12）本ずつ計 30（24）本挿し、ウラジロを 2（4）枚ずつ挿す。

② 御座の料理
・新穀で　炊いた飯に忌穂（藁スボ）を挿したもの
・昆布・イリコでだしをとり、豆腐・薄揚げ・大根・里芋を具とする味噌汁
・串に挿した焼き豆腐の上に白味噌・あわびのしをのせ、九年母半月切り 1 切れを添えた田楽
・三角揚げ・大根・人参・タツクリ（イリコ）のナマス
・蓮根・大根・牛蒡・里芋・人参・蒲鉾・揚げ豆腐の煮付け
・九年母（山・昔は吉田から）・菱餅（田・昔は多禮から）・ゲバサモ（海・江口）
・栗はい箸（神供は柳箸）

③本殿神事（祭典）
6：00 から。神職は皆、狩衣姿。
田島区長・江口区長・班長の 3 人が参列し玉串奉奠。前 2 列は御座奉仕の人々が座る。
祭典では宗像大社に伝わる「古歌」が詠唱される。
参列者にはその歌詞と由緒を記した紙が配布される。

④座の進行
・お座の場「晴明殿」の神座に特殊神饌「御菓子」一台を改めて供える。
令和元年より「儀式殿」が会場となり一座 50 人→36 人に人数縮小　5 番座まで
・その前の正座に新筵（コモ）が敷かれ、中央は宮司の座。左右にゲバサモを持ってきた江口の代表 2 名が座る。
・正面向かって右上座に神職たち、左上座に当たる場所に太鼓が据えられ、大広間に四列に机をならべ、座に参加する人はコモ上に着席する。
・一同着席すると一鼓、太鼓が打ち鳴らされる。

・神職がお祓いをし、白衣・白袴の当番が頭を垂れた一座の人の上を御幣で祓っていく「幣引き」が行われ、次ぎに御神酒（白酒）をついでまわり、一同神酒拝戴
・総代が音頭をとって、「セー」シャンシャン「も一つセ」シャンシャン「祝うて三ごん」シャンシャンと打ち込み食事に移る。
＊早朝五時にゲバサモを届けた江口の人は、大社から御礼に神酒二升をもらい江口に戻り、氏神辻八幡宮にゲバサモを供えて祭を行った後、公民館で座を持つ。
＊江口は６組あり、１年ごとの交替で当番を務める。ここでの料理は、ナマス（ヤズ・大根・人参）を皿に盛り、半紙に御飯・菱餅・ゲバサモの味付けた物（湯通ししたゲバサモと潰した黒豆をすり鉢で味噌・砂糖・みりんで和える）を載せ雑煮がつけられる。雑煮は鶏ガラ・昆布・干椎茸のダシ。具は人参・里芋・椎茸・かまぼこ・カツオ菜（串刺しにして用意）
＊江口では「霜月祭」という

《ゲバサモの依る江口の浜》
ゲバサモがないと古式祭は始まらん
ゲバサモが流れ着くのは江口の浜だけ（今は勝浦浜に採りに行く）
浜に打ち上げられたゲバサモを採る
江口の浜は鐘岬を望む白砂の美しい浜
ハマは「秀間」→目立つ優れた場であり、神依る場、神を迎える場。

【鎮火祭】
古式祭の朝、消防団参列のもと行われる
忌み火をカワナ（川菜？）で消したあと、踏歌の斉唱

VIみあれ祭

① みあれ祭の意味
・みあれ＝御生れ
神または貴人が誕生・降臨すること
・みあれ神事
新しい命を持った神を誕生させること
上賀茂神社「御阿礼祭」５月１２日
・沖津宮（田心姫）・中津宮（湍津姫）・辺津宮（市杵島姫）の三神が一緒になることによって新しい命を得、若々しく力強い神に生まれ変わる 。

② みあれ祭の整備
現在のみあれ祭は、末社二柱神社より三体を祈念奉遷して辺津宮本殿前にそれぞれ奉安しているが、現下の世情よりしてこれを沖島、大島、辺津宮の高宮より計三体を奉遷し、特に大島中津宮より奉遷する行事を盛大に斎行したならば、大島及び宗像七浦の漁民が放生会の前祝祭に参加することになり、放生会大祭を、名実共に挙郡一致して斎行する意義は極めて大きい。ここに古儀を参照して“みあれ祭”を整えたいと思う理由がある。
小野迪夫権宮司（『宗像第２１号』昭和３７年）

③ 参照した古儀とは
御長手神事
『正平二十三年宗像宮年中行事』
息御嶋（沖ノ島）の項
春夏秋冬４回の御長手神事のことを記す

沖ノ島と第一大神宮の間で行われた
「息御嶋　日本與高麗之堺。第一大神宮本社」

④ 御長手とは

『宗像大菩薩御縁起』

・神功皇后の戦いの時、織幡宮の祭神武内大臣が織り、強石将軍（宗像大菩薩）の御長手に付けた赤白二流の旗 。

・軍の前陣に捧げて進軍し、敵地では干珠・満珠とともに皇后の軍を勝利に導く。

・凱旋の後、沖ノ島に立置く 。　その竿竹は枯れることなく生育。

⑤ 神璽

・沖ノ島で育った榊に、沖ノ島で育った忌竹を箸の長さに整え麻の緒で結い付け紙垂をつけ神霊うつしを行い櫃に納めたもの 。

・中津宮神璽は大島の、辺津宮神璽は辺津宮周辺 に生育した竹を使う。

⑥ みあれ祭を支える祭祀組織

・海洋神事奉賛会

七浦（大島・地島・鐘崎・神湊・勝浦・津屋崎・福間）の漁業協同組合

＊それぞれの浦にはそれぞれの氏神

＊宗像大社は宗像の総社

・水難救済会　　・大島の沖・中両宮奉賛会

⑦ 沖ノ島の祭祀

・沖ノ島祭祀を受け持つ一甲斐河野氏は通常大島にいて、遙拝所で祭祀を行う 。

＊中津宮の祭祀は二甲斐越智氏

・近世は沖ノ島に渡ることは年２回。

・漁期には一甲斐から命じられた肝煎りの者が沖ノ島に渡り正三位社での竜宮祭等執行。

・現在は中津宮の神職は任期 2 年で交替、沖津宮は 10 日間のローテーションで宗像大社（辺津宮）から派遣され勤めている。

⑧ みあれ祭の日程

9 月中旬　沖津島神迎え、神璽を中津宮に安置。

10 月 1 日

8：30　中津宮では拝殿に沖津宮（向かって右）と中津宮（向かって左）の輦台を並べ出御祭が執り行われる。
供奉する船では、出航前の御神酒あげ

9：00　辺津宮で出御祭。市杵島姫は神湊へ御発輦。

9：20　打ち上げ花火を合図にまず先導船が出港。

9：30　港外で隊列を整え、沖津宮先導船、同御座船、中津宮先導船、同御座船の順で神湊へ向かう。その後に供奉船、供奉船の左右には波切り御幣をつけ満船飾りをした各浦の随行船がつく。

10：00 頃　沖・中の御座船は神湊と鐘崎の間のナギノマ（玄海旅館の 300m沖合）に到着すると停泊し、供奉の船々はその周りをゆっくりと右回りで回り、御座船にお賽銭を投げ入れる。

10：30　御座船は神湊に入港。市杵島姫神は神湊で出迎え。玄海魚市場広場で三基の輦台が揃うと頓宮へと行列で神幸する。各 8 人の若者が舁く輦台には御名捧持者・奉行（漁協代表）・神璽奉戴神職が従って、沖津宮・中津宮・辺津宮の順で進み、その後に、後従と供奉員が続く。

10：50　頓宮祭斎行。頓宮は神湊の突端「草崎城跡」にあり、石の祠がある。
頓宮祭の後、陸上神幸（平成 23 年より）。
郵便局前で神璽は輦台から出され、自動車行列によって辺津宮に向かう。
11：40　辺津宮入口の鳥居前で車を降りた神璽は、3 人の神職（禰宜）が捧げ持ち、露店が並び賑わう参道を通って神門をくぐり、拝殿正面から昇殿して本殿に安置

⑨ 新しい要素

・陸上神幸　平成 23 年から→頓宮から郵便局まで陸上神幸し、車で神璽を運ぶ
平成 29 年から→頓宮祭はなく、神湊ターミナル横で駐輦祭齋行。トラックの荷台に載せ玄海コミュニティまで陸上神幸。玄海コミュニティより徒歩による陸上神幸。辺津宮入御。入御祭齋行。

・高宮神奈備祭　平成 17 年、氏子青年会を結成し、合併記念として始める 。
八女神事古歌奉唱・悠久の舞・あをつみの餅（小判形のよもぎ餅）

⑩ みあれ祭の意義

・古代以来、連綿と続く根本御影向の地「沖ノ島」へのまなざし
・沖ノ島の神霊を辺津宮に迎えるという形で実現
・挙郡一致の祭祀の実現によって神郡宗像の再現

世界遺産「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」のシンボル的な祭

＊平成 29 年 8 月 22 日　宗像市指定無形民俗文化財